

本講演ではまず、ソ連あての遺書とも密接にかかわる「遺囑」の作成過程を、できるだけ原資料に即して検討し、それが孫文の死の一月ほど前に国民党の指導部によって起草、討議されていたこと、汪精衛ら孫文の側近たちは遺書が孫文の死後に持つであろう権威性を予見し、その作成、署名の過程がいかなる疑惑も呼ばぬよう、周到に手続きを踏んでいたことを論証した。その物証となるのが、病床の孫文の前に「遺囑」原案を朗読したさいの汪精衛と孫文との談話記録（一九二五年二月二十四日付）である。

これに対して、ソ連あての遺書は、その作成過程が不明瞭であった。また、それが公表されたのも、「遺囑」と同時ではなかった。国民党側の人士が、ソ連あての遺書を孫文の正式の著作と認めない所以である。また、実を言えば、英語で書かれたとされるソ連あて遺書の原文書自体が、そもそもこれまで確認されてこなかったのだった。孫文研究者たちは、英字新聞に載ったものや中国語に翻訳された活字版をもとにして、事を論じてきたのである。

問題のソ連あて遺書の原文書は、モスク

ワの公文書館に保存されている。筆者は、その原文書に基づいて、そのスタイル（作成日付、副署者など）を分析した結果、次のような結論にいたった。① 原文書は孫文自筆のサインを持つだけでなく、国民党関係者七人の副署を持ち、形式面で孫文の著述としての条件を備えている。② その副署は、国民党の首脳たちも同文書を孫文の遺言と認知していたことを意味する。③ ただし、三月一日の日付のみを持つソ連あて遺書の形式は、二月二十四日の日付を併せ持つ「遺囑」の形式とは異なっており、それが当初より「遺囑」と同様に準備されていた文書ではなかったことを物語る。すなわち、ソ連あて遺書は、孫文の臨終の際に、こうした文書の必要性を感じた者が起草し、「遺囑」への署名に合わせてすべり込ませた文書であった。

ソ連あて遺書がこのような奇妙な作成過程を経た原因、そしてソ連あて遺書が孫文の死後にたどった運命、それらはいずれも国共両党の融和と対立、それに連動する中国とソ連の離合常ない関係を如実に反映するものだった。そして、孫文死後に確立する孫文への尊崇体制が、「遺囑」やソ連政

府あて遺書といった文書の持つ政治性、党派性をより増幅させることとなる。そうした尊崇体制は、孫文の死後間もなく、「総理記念週」という定型化した孫文記念行事を生み出したが、それは国共両党に共通する領袖個人崇拜の起源とも言うべきものであった。

二〇〇五年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇五年度大会・総会は、一月二日（水）一三時から一七時まで、京大会館において開催された。

本年からはプログラムを改め、最初に総会を行なうこととした。まず紀平英作理事長が挨拶に立ち、開かれた学会をめざして改善に取り組んでいきたい旨を述べた。ついで島居一康氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（吉川真司常務理事）からは、会員数・史林送付数について、本年度から始めた学生会員制度がひとまず順調にすべり出し、会員数の増加をもたらしたことが報告

された。このほか役員の交代、名簿の作成などについても報告があった。

編集(杉山正明常務理事)からは、『史林』が順調に刊行されていることが報告され、さらに来年四月に「国境」をテーマとしたシンポジウム形式の例会を開催し、それを特集号に反映させたい旨が述べられた。会計(田中和子常務理事)からは、二〇〇四年度決算報告、および二〇〇五年度予算案が提案され、拍手で承認された。

広報(吉井秀夫常務理事)からは、ホームページの運用や大会ポスターの作成・発送について報告があった。なお、広報担当常務理事は本年度から新たに置かれたものである。

これに引きつづき、公開講演が行なわれた。講演は次の二本であった。

泉 拓良氏「フエニキア・テュロス遺跡

発掘調査の成果——ヘレニズム・ローマ時代を中心に——」

石川慎浩氏「死後の孫文——遺書と記念週」

講演者紹介と討論司会は、吉井秀夫・永井和岡理事がとめた。講演内容は前掲のとおりであるが、ともに近年の調査に立脚し

た斬新な研究報告であった。討論も活発に行なわれ、異なった分野から有益な意見が出されていたのが印象的であった。公開講演ののち、夫馬進理事が閉会の辞を述べた。

(文責・吉川真司)

受 贈 誌

(二〇〇五年一月十七日)
二〇〇五年十二月二日)

信濃(信濃史学会) 五七一〇―一

一橋論叢(一橋大学一橋学会) 一三四―三

―四

日本学刊 JAPANESE STUDIE

S (中国社会科学院日本研究所中華日本

学会) 二〇〇五―五

史学雑誌(史学会) 一一四―一〇

国家学会雑誌(国家学会事務所) 一一八―

九―一〇

Вестник Древней Истории (Институт

Всеобщей Истории РАН) 032

Этнографическое Обозрение (Институт

Этнологии и Антропологии имени Н.

Н. Миклухо-Маклая РАН) 2005-4

ИЗВЕСТИЯ русского ГЕОГРАФИЧЕСКОГО ОБЩЕСТВА (РОССИЙСКАЯ АКАДЕМИЯ НАУК РУССКОЕ ГЕОГРАФИЧЕСКОЕ ОБЩЕСТВО) 136-3-4

史学(三田史学会) 七四―一―二

文化(東北大学文学会) 六八―三―四

文化(東北大学文学会) 六九―一―二

韓国史研究叢報(韓国国史編纂委員会) 一

三〇

美術研究(東京文化財研究所美術部) 三八

七

人文地理(人文地理学会) 五七―四

経済学研究(九州大学経済学会) 七一―五

―六

経済学研究(九州大学経済学会) 七二―一

人文研究(小樽商科大学) 一一〇

日本史研究(日本史研究会) 五一八

日本歴史(日本歴史学会) 六九〇

社会経済史学(社会経済史学会) 七一―二

経済研究(一橋大学経済研究所) 五六―四

アジア研究所所報(亜細亜大学アジア研究所) 一一〇

中央研究院歴史語言研究所集刊(中華民國

台北中央研究院歴史語言研究所) 七六一